

つた日本畫とは頗る相違のある作物中、自然の副産物の外に、或る動機を發見するに熱心であつたのである。

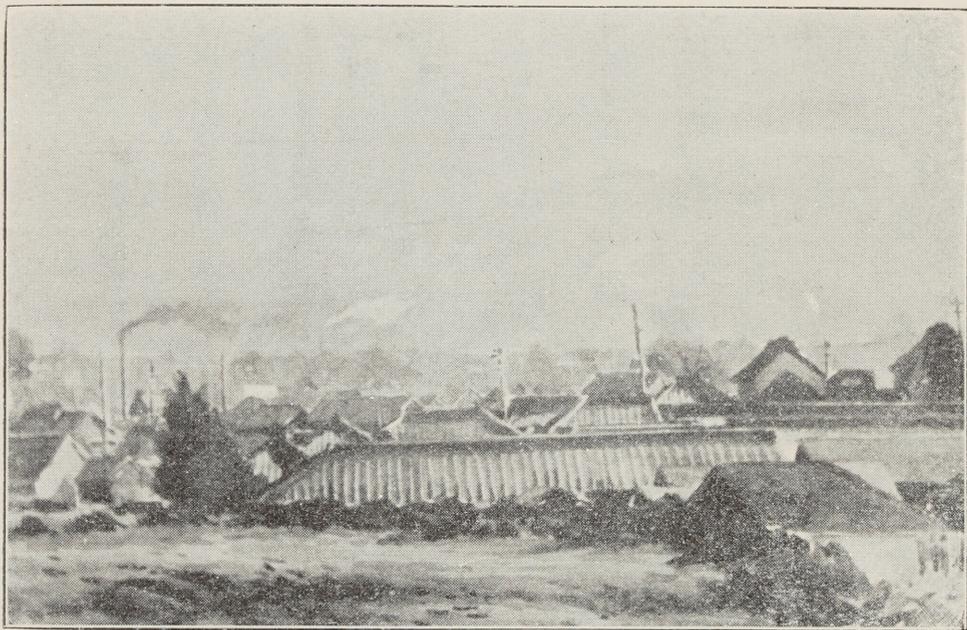
淺草祭では多くは新年の飾物を賣る、金を爬集める藁の杷、藁袋、ダイコン、赤いタイ、これは皆縁起を祝ふもので、牛の目に矢を貫いた射的は、「目的に命中する」といふ意である。如上のものを福の神の假面の周圍へ並べてある。で自分も幸運を得んが爲に、これを購ふて、十二月の十日に淋い花のない太平洋を横切て航行し去つた。(了)

そのをりく (二)

三宅克己

(前略)

春以來今日迄の研究の結果が直に繪にならずして終りし物中々に多く、申さば無駄の勉強のやうなれど、此爲め種々得たる處有之候、且又研究



水彩畫講習所十二月例会一等 赤城泰舒筆

と申側より申さば、あながち繪を拵へねばならぬと限らぬ事をも深く悟り申候。一ヶ年一枚の善畫は百枚の駄作に優る事にて、一枚の成效したる繪を作らん爲めに、五枚十枚の「けし」は何でもなきと存候。私も縁の有る數だけ是非に畫を作らねばならぬなどの愚な考は、全く止める事と致候。(下略)

三十三年七月小諸より

神は人の石を刻みし前より花を開かせ給へり。美術の極意は自然に摸するにあり、自然に化するにあり、自然となるにあり。自然のインスピレーションを待ちて之を吾が手腕に運用するにあり。

* * * * *